

# Table Talk Vol.5~Vol.8 開催 ~研究者の交流促進を目的として~



7月19日(金)  
Vol.5 with 湊晶子先生

湊先生は東京女子大学の前学長であり、現在はワールドビジョンジャパンの理事として、世界各国で活動をされています。アメリカ留学時代のお話や、子育てとの両立での工夫、そして学長を経た今何を目標としているか等、パッションあふれる話し合いが行われました。



10月24日(木)  
Vol.6 with 花野 泰子さん

花野さんは現在、東京女子大学の博士後期課程に在籍中。以前は制作会社で女性向けの情報番組を多くてがけられていました。また、5歳の男の子の子育て中でもあります。学生時代から制作会社での話、そして大学院に進むまでの経緯、研究と子育ての両立などについて伺いました。



11月18日(月)  
Vol.7 with 川野 江里子さん

現在、東工大で教育研究支援員として活躍中の川野さん。当日は、学生時代から就職、結婚、そして建築を学びたいと思った気持ち、人との出会いについて伺いました。参加者には卒業生もいたことから、これからの働き方、生き方などについて有意義な対話の時間をもつことができました。



11月22日(金)  
Vol.8 with 久保 響子さん

久保さんはこの春3月に東京女子大学の修士課程を修了され、現在は印刷会社に翻訳コーディネーターをされています。ちょうど去年の今頃は修士論文を書いていたことから、修士論文を書く大変さ、修士課程での生活、その後の就職活動、現在の仕事などについて話していただきました。

## よりよき研究活動支援に向けて ~アンケート調査から~

東京女子大学 大学院の修了者（1993年3月～2012年9月）を対象に、アンケート調査を実施しました。その目的は、大学院のあり方や将来像を検討し、研究者の支援活動を検討する基礎資料とすることにあります。

東京女子大学 大学院に期待することの上位は「女性の多様なライフスタイルに柔軟に対応する大学院」(18%)、「高度な専門職業人養成を重視した大学院」(16%)、「研究へのモチベーション維持の為の環境が整った大学院」(13%)となっています。

また、自由記述での代表的な要望は以下のとおりです。

### <在学中>

「大学院間の交流を積極的にしてほしい」、「研究環境の整備」、「奨学金、研究奨励金の充実」「モチベーションを高めあえる環境が必要」

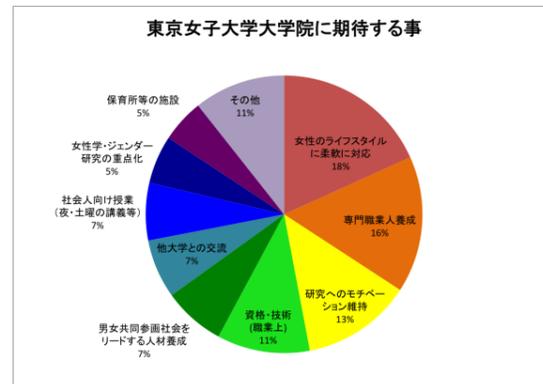
### <修了後>

「研究継続のための支援」、「修了後のネットワークが必要」等

### <ライフイベントと教育・研究の両立面>

「保育園、ベビーシッターなどのサポート体制」、「子どもがいても学びやすい環境」、「周囲の理解」等……

さらに東京女子大学を卒業後、他の大学院に進学された方を対象にした調査も準備しています。調査結果については、ホームページ等で順次報告をしていきます。



## 東京女子大学 女性研究者支援室

【住 所】〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1 【場 所】4号館 4202号室  
 【T E L】03-5382-6173 内線 2466 【E - Mail】sowr@lab.twcu.ac.jp  
 【開 室】(月)~(金) 10:00~17:00 【U R L】http://www.sowr.jp  
 【相談受付】(月)~(金) 13:00~18:00 (予約はメールをお願いします)

東京女子大学  
女性研究者支援室  
2013年 秋号



平成24年度 文部科学省  
科学技術人材育成費補助事業  
女性研究者研究活動支援事業

## 女性研究者研究活動支援事業 シンポジウム 2013

2013年11月11日(月)、TKP市ヶ谷カンファレンスセンターにおいて、文部科学省主催の「女性研究者研究活動支援事業 シンポジウム 2013」が、世界で活躍できる理系女性研究者の育成をテーマに開催されました。

午前中は、ポスターディスカッションに引き続き、分科会が実施されました。本学は、女子大学グループの分科会（お茶の水女子大学、津田塾大学、日本女子大学、武庫川女子大学、福岡女子大学）に参加しました。分科会では各大学の取組や課題についての報告をもとに、解決策や新たな方策等について活発な議論がなされました。そして女子大学グループの提言として、世界で活躍できる理系女性研究者育成のために、「ポジティブアクション（女性優遇措置）と幅広い支援策（情報・経験）」が必要であることを提言しました。



午後は、郷通子氏（大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構理事）による基調講演「国際的に評価される研究とキャリアをめざして」、北澤宏一氏（東京都市大学学長）による特別講演「参加することと継続すること—そのためのしかけ」に引き続き、分科会発表、パネルディスカッションが実施されました。

本学が、文部科学省の科学技術人材育成費「平成24年度女性研究者研究活動支援事業」の対象として選定されてから約1年が経過しました。女性研究者研究支援員制度も整備され、啓発活動としての各種セミナーの開催、研究者の交流促進等、多くの方々の力を借りながら実施してきました。この場を借りて感謝するとともに、女性研究者が研究を継続しやすく、成果をあげられるような支援の充実を目指して、スタッフ一同、気を引き締めて着実に進んでいきたいと思っております。

## Interview 2nd Season 更新開始

女性研究者支援室ホームページの、メインコンテンツの1つとして掲げている『Interview』ページ。研究者の方に学部生・大学院生がインタビュー、記事の執筆まで行っています。そしてこの秋から、2nd Seasonの更新を開始致しました。1st Seasonが東京女子大学OB・OGの方だったのに対し、2nd Seasonは東京女子大学の先生方にお話を聞かしています。



記念すべき第1回は、国際社会学科教授 轟莉莉先生。専門分野である文化人類学を選ぶに至るまで、そしてどのような研究者を目指していくか。後輩達へのメッセージもお伺いしました。今回は、そのダイジェスト版をお届けします。

### 前編「研究者の道へ」

1966年から始まった文化大革命の影響を受け、基礎教育機会の一切を失った轟先生。しかし、労働者として働く中で、中国の体制や社会に対し疑問を感じていた。もっと歴史や現実を認識する力を得たい。そう感じた先生は、基礎教育の全てを独学でやり遂げ、ついに大学進学を果たす。「幅広く知識を吸収したい」という思いから哲学を専攻したが、当時の中国での哲学は非常に硬直化しており、先生は不満を抱いていた。転機が訪れたのは、大学3年生のとき。共産党によって1950年代初期から廃止されていた社会学が復活したのだ。社会学に興味を抱いた先生は、猛勉強の末大学院に進学し、中国における社会人類学第一人者 費孝通教授と出会う。そして、東京大学で人類学を学ぶ事を勧められたのだった。その理由というのは……

前編の詳細や、後編「研究者として」が気になる方は、是非支援室HPにアクセスしてみてください。  
(支援室HP URL → <http://www.sowr.jp>)





## 女性研究者キャリア形成セミナー開催

### 「数学の新たな挑戦 & 東北大学における女性研究者育成支援」



7月18日(木)、東北大学大学院理学研究科教授 小谷元子氏を講師として、女性研究者キャリア形成セミナーを開催しました。

講演のテーマは「**数学の新たな挑戦 & 東北大学における女性研究者育成支援**」。

前半は、丁寧に作られたスライドと資料を元に東北大学が取り組んでいる女性研究者支援についての紹介でした。東北大学構内には二つの保育園があり、**女性研究者が安心して子供を預けられるようになっています**。また、東北大学は次世代を担う女性科学者の支援にも力を入れています。



後半は、小谷先生の専門分野である幾何学について、2012年から機構長を務めているAIMR(東北大学原子分子材料科学高等研究機構)について述べられました。科学技術に数学者が直接関わることは世界的な流れになってはいますが、研究所レベルで**数学と材料科学のコラボレーションを組織的に進めるのは初の試み**であるとのことでした。

#### <小谷先生からのメッセージ>

「人と違う視点で物事を考えることはとても大切で、科学が発展していくためには様々な視点が用意されていることが大切だと思います。男女に生物学的な差があるのかわかりませんが、**少なくとも育てられ方は現状では違って、色んな異なる感性や視点を持っているので、研究者は今までと違う発展を望むことができ、それは日本全体の強みになるだろうと思っています**」



## 男女共同参画セミナー開催

### 「自分にこそできる仕事～あきらめなければ道は開ける～」

11月7日(木)日本IBM(株)IBMフェローの浅川智恵子氏を講師として、男女共同参画セミナーを開催しました。「**自分にこそできる仕事**」をテーマに、浅川さんがこれまで関わってきた仕事、生き方、考え方、さらには未来についてお話していただきました。

目が見えなくなり、夢が持てなくなったとき、色々な情報を調べた浅川さんは、**目が見えなくても特にアメリカでは様々な仕事に就ける**ということを知り、大学は英文科に進学。しかし、1980年代以前の情報源は紙の点字と録音……。

ノートをとるのも、教科書を読むのも、本当に大変だった事から、その環境を変える技術の開発をすることが目標の1つになった。

そしてIBM入社後、目が見えなくても情報にアクセスできれば、素晴らしい時代が開けるのではないかと、との思いから開発したのが、視覚障がい者向けインターネット音声読み上げソフト「ホームページ・リーダー」。ユーザーからの「私にとってインターネットは、社会に開かれた窓です」というコメントを受け取り、**情報にアクセスするというのが、まさに社会に参加することにつながる**ことを浅川さん自身も気づかされた製品になったそうです。

その後、仕事と結婚、出産・子育てという忙しい生活を送っていたが、一方で、動画や写真といった**文字にできない視覚的な情報が増えていく状況**に、「目が見えなくても認知できる情報量は、どれほどになってしまうのか」と不安を感じていた。「これはやっぱり研究してみよう」と、2001年に東京大学の先端研に入学し、2004年に博士号を取得。そして、2009年、遂に浅川さんはIBMの最高技術職であるIBMフェローに就任する。



#### <浅川さんからのメッセージ>

**やり遂げるということ、決めるということ、目標をしっかりと設定することが非常に重要だった。**  
「私も、自信は常にありませんでした。ですが、私のモットーは『あきらめなければ、道は開ける』」



## 女性研究者キャリア形成セミナー開催

### 「東京女子大学のキャンパスは誰にでも使いやすいか」

10月5日(土)、公立はこだて未来大学 メタ学習センター准教授 大塚裕子氏(1991年本学文理学部日本文学科卒業)を講師として、女性研究者キャリア形成セミナーを開催しました。

「**東京女子大学のキャンパスは誰にでも使いやすいか**」をテーマに、4時間という短い間に、  
・フィールドワーク ・フィッシュボウル ・ワールドカフェ 等、  
多くのワークショップが盛り込まれた、参加型・体験型の充実したプログラムの実施となりました。在校生、卒業生、教職員、一般の方と、多様な人が参加しました。



#### <見つける>

導入として、今なぜ「話し合い」学が必要とされるのか、その背景および自律型対話プログラムの概要についての説明が行われた後、まずは体験してみようと、4~5名1グループとして「問題発見ワークシート」と付箋、ペンを持ち、学内のフィールドワークに出かけていきました。

#### <整理する>

次に、見つけてきた事例の付箋紙の束をともに、「問題整理ワークシート」を用いて、情報を整理。さらに提案に向けて、自分たちのグループにとって、どの問題を大切であるとするか考えます。



#### <決める>

その手法は、フィッシュボウル。まず、先行のグループのディスカッションの様子を、後行のグループが「ディスカッションワークシート」を活用し、観察した事をメモしたうえで、7つの項目についてチェックしていきます。その後、後行のグループも同様にディスカッションをし、先行のグループがその様子を観察します。



#### <提案する>

いよいよ、改善策を提案するために、ワールド・カフェ方式を用いた対話を実施されました。席を移動しながら、各テーブルで対話が繰り返されることにより、多様な価値観、考え方、改善策を知り、多角的な視点から考えを深める時間となりました。

色々なグループで対話を深めたメンバーがもどり、3枚の改善提案ワークシート(1.誰のつかいやすさを考え、どこ・何を、どのように改善、2.どのような理由・意図・ねらいで、3.改善案のポイント)をもとに、改善策の提案プレゼンテーションが行われました。今号では、一部を抜粋してお届けします。

#### ・キャンパスマップについて

1. 誰の：マイノリティになってしまう人  
(新生入生、新任教員、非常勤講師、保護者など)
2. 理由：来校者に対する「歓迎感」がない
3. 改善案のポイント
  - ・校門付近にキャンパスマップを設置(寮生や学生の安全性に配慮した作りに)
  - ・誰にでも分かりやすい建物のナンバリング、建物には大きな看板を

#### ・掲示板について

1. 誰の：大学に関わる全ての人
2. 理由：現状、掲示板が色々な場所にあり、わかりにくい  
狙い：情報のホスピタリティを高める
3. 改善案のポイント
  - ・掲示板を一カ所に集約
  - ・掲示板マップを作る(散在した情報をまとめる)

#### ・扉について

1. どこ：6,7号館の入り口の扉
2. 意図・狙い：通行の妨げになるのを防ぎたい。人が安全かつスムーズに通る
3. 改善案のポイント
  - ・透明な自動扉、引き戸にする
  - ・6,7号館以外の扉も改善すべき

#### 参加者の声

「話し合いを客観的に観察できたため、今後に役立つ話し合いの方法を得られた」  
「立場、背景の違う人たちとワークショップを通して、自分の考え方と他者の考え方は全く異なる事がわかり、意見の共有は大切だと改めて実感した」

